

---

## BeautiFoolのエッセイ 2

アルル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Beautiful Foolのエッセイ2

### 【Nコード】

N5243I

### 【作者名】

アルル

### 【あらすじ】

これはエッセイです。なので、あらすじは書けません。申し訳ありません。評価人の方には、是非とも読んで欲しいものです。

## (前書き)

これは、批評、評価の在り方、また、その遣り方について言及したものです。異論、反論の有る方は、書き込む際、自身の立場とその根拠を明確にし、かつ、自身の思想、信念に懸けて書き込んで下さい。尚、荒らしにしましては、管理人に報告させて頂きますので、悪しからず。

これは、前回書いたエッセイの第二弾である。以前は、『影響力の功罪』について書いたが、今回は『批評・評価』について書いてみたいと思う。

批評とは即ち、良し悪しを明確にする為のものである。評価もそれに準ずると言える。疑う者は字引を引いてみれば良い。

一般に評価と言つと、良いイメージを浮かべる者が多いが、実際にはそうではない。評価とは、その意味、価値、そして、技術を著す物である。で、あるからして、批評と考えてもらった方が良い。実際、映画などでは、批評がその作品の人気を決めると言つても過言ではない。然し、それは本来ではない。現実に評価されべき作品が、ある程度の知名度を持った批評家にケチを付けられ、B級映画に成り下がってしまった例は数え切れない。

僕としては、そういった批評家には、社会から速やかに退出してもらいたいと思つている。何故、とは言うまい。先述の通りである。ここで本題に移りたく思うが、これまでの記述で既に僕の言いたい事は解つて貰えただろうか。出来れば、細部に亘つて論述するのは避けたいが、恐らく無理であろう。であれば、遣るしかない。

評価、感想の依頼というとても便利な機能の有る当サイトではあるが、そこには大きな問題点が存在する。それは、匿名性の罪である。小説も書いていない、何も正論を述べない者達が横行している。それが現状である。プロだか何だか知らないが、『ここをこう直せ、この表現を直せ、文章作法を守れ』などとほざく輩が目につく。

ここで、唐突ではあるが、普段の僕の口調で言わせて貰う。

「文章作法つて何や。アンタ、それホンマに習得しとるんやろな。そんな言つからには構文論くらいは知つとるんやろな。それが何で“学”やのうて“論”なんか知つとるんやろな。ほんならええ。

アンタは候文きょうぶんでも書けるし、漢文もお手のもんなんやろな。しかもそれ、現代文に直して幼稚園児にでも解るよう翻訳出来るんやろな。ホンマ、大したもんや」

どうだろう。定めし、腹の立ったことだろう。然し、だ。腹が立ったという事は、即ち、出来ないという事を露呈する事だと気付いて欲しいが、まあ、無理だろう。この年齢層は低いから、また荒らしでもしてやるかと、鼻息荒く意気込んでいるのだろう。因みにこれは警告であるが、限りなく少ない情報から此方の内情を探るのは止した方が良い。ハッキングしていると公言しているようなものだからだ。

話が逸れてしまったが、言っておかなければまた遣りそうな連中が居るので一応。悪しからず。

さて、本題に戻るが、彼らの語る文章作法とは何であるか。明治の頃、言文一致運動が興ったが、それをまるで無視するようなそれは、誰が考えたのであるか。既存の文学に最も象徴される様に、これまで有った考えを引き継いで、それを文学と称するのは真に愚かしく、また、嘆かわしい。それと同じく、元の文章作法に立ち返るのならば、口語文では語れなくなる事を承知しているのであるか。先述の通り、候文きょうぶんや、漢文といった難しい文体を用いなければならなくなる。本当にそこまで考えて言っているのであるか。そうでないなら、叱ってやらねばなるまい。僕にはそんな気は（メンドイから）無いが。しかも、それを語るのがプロでもなく、何も書く事の無い連中なら尚更である。何の根拠を以って、修正点を確定しているのか全く以って解らない。少なくとも、それ程の事を言うからには、ここに居るアマチュア達の何十倍も本を読んでいなければ、正直、何の説得力も無い。読者としての評価であれば、真摯に受け止めるべきではあるが。評価欄に書き込むだけの連中には、是非とも自己紹介と、自身の評価に対する自信の根拠を挙げて貰いたいものである。いや、それ以前に、直したらどうなるのかを問いたい。書き手の“色”を損なうまでして直させたいのであるか。そんな人

には是非言いたい。『個性の無い文章には誰も振り向かない』と。と、言うよりも、そんな物には価値が無い。

また、よく見かけるものとして、自身の物は棚上げにして評価をしている連中が居る。これは忌々しき事態である。これこそ、本末転倒だからである。確かに、半分は正論として受け止めるべき内容ではあるが、然しである。どれ程の文章を書くのかと見に行ってみれば、「・・・」である。何故そんなレベルで人の事をとやかく言いたがるのか。自身の勉強の為と言っている者達は評価出来る。何故なら、“人の振り見て我が振り直せ”、だからである。そう言っている者の内、半数程は言っているだけであるが。

また、リーダーについても疑問が有る。主に、二点リーダーと、三点リーダーが有るが、何故それを単体で使う事が許されないのか。これは大いに疑問である。存在自体の否定と言っても過言ではないからである。現状に於いては、二点リーダーは、三連続として、六点リーダーとされ、三点リーダーも同様である。何故、六点リーダーにしなければならぬのか。全体、誰がそんな事を言っているのか。僕からすれば、彼の者は定めしバカである。何故なら、先述の通り、単体で存在するリーダーの存在証明に気が付いていないからである。単体で存在する以上、それには確固とした意味と価値が有り、それは決して揺るがないものと言えるからである。現代の文体に於いてそれが当然だと言うならば、それは定めし研究をしていない証拠であると言えよう。既存の概念に於いてのみ文章を書く事が許されないのならば、最早文壇とは取るに足らぬものであり、そこで賞とは愚を以って与えられる最低の称号である。ここで、改めて訊きたい。

「君はそんなものの為に書いているのか？そんな事で満足するのか？」と。

まあ、それは個人の自由でしょう。

ここで蒸し返すようだが、リーダーに関しての僕の見解としては、一々連ねなくとも良いというものである。何故なら、調べた限りに

於いてはそんなルールなど無かったからである。やはり、それを否定するのなら、どの誰がそんな事を言っているのかを明確にして欲しいものである。或いは、自身の主観に基づいて至った思考であるならば、その根拠を表明し、何故そう考えるのかを明確にすべきである。そうでないのなら、あまり偉そうな物言いは避けて欲しい。普通に、“こうしたらどうだろう”というような、可能性を示唆するような物言いにしてもらいたい。でないと、こちらとしては、かなり腹が立つ。

荒らしに関しても同様である。遣るなら遣るで、自分の立ち位置を明確にし、かつ、対等に戦う意志を表明してもらう必要が有る。彼らは全体何がしたいのであるか。ケンカがしたいのなら、自分の住所、氏名を公にし、その上で、宣戦布告をすれば良い。それとも、単にからかって遊びたいのであるか。ならば、場所を選んで欲しい。個人的には、どこの誰だか分かったなら、タイマンでもしに行きたい処だが、この歳になって傷害などという詰まらない理由で前科持ちになるのも馬鹿らしい。であるからして、荒らし目的の人間は早々に自身の罪を改めるべく精進して欲しいものである。

さて、大分話が逸れてしまったが、この際言っておかねばならないと判断した為、随分と文字数を割いてしまった。ともかくとして、ネチケツトはきちんと守るべきである。以前、僕も、遣り方が規約違反であるとの指摘を受け、一度退出し、またここに戻った。責任の取り方として、それでは充分ではないと言われると思うが、誰にどういった処置をすれば良いのか解らないので致し方無しとした。現在、その上で書いている。個人的には、自らの罪を認め、素直に管理人殿に連絡を取り、その上で退出し、戻り、複数人での参加を報告の上、正式に了承を得たので、これ以上は以前の問題に触れる必要は無いと判断するものである。従って、僕らに対する荒らし、或いは、それに準ずる感想欄への書き込みに対しては、許す気は無い事を宣言する。

依然として話がズレているので、そろそろ本題に戻そうと思う。

重ね重ね言うが、批評と評価とは完全ではないにしろ、同一の意味合いを持つ事を再認して欲しい。一方的で、先述の通りの『直せ、作法を守れ』などの感想が多く書かれれば、感想の内容を頼りに物を読もうとする人達にとつては大層迷惑な話である。実際には高評価されべき筈の物が、書かれた感想などにより、読まれもしないという事態が起こってしまう事も有る。そういった時、その評価をした人間の眼力が問われるのは言うまでも無いが、実際には単なる読み手か、或いは、にわかプロか、また或いは、嫌がらせなのか。彼らはそれを正直に告白すべきである。そうでないなら、評価人としては最低であると言えよう。いや、それ以前に、先に挙げた“構文論”の存在すら無視し、社会的に言われる処の文章作法などを持ち出す時点で彼の者には適正が無いと言えるだろう。

文章とは構築するものであり、将棋や囲碁のように定石の無いものと考えてるのが正しい。基本的な構造を無視する事は出来ないが、然し、そこから先は、書き手の頭の中で構築すべきなのである。言の葉を紡いで文字と成し、文字を紡いで文と成す。それらが連続する事に因って文章と成るのである。であるからこそ、その文章には書き手の想いが宿り、決して無視する事の出来ない大切なテーマが浮かび上がるのである。

彼の者達の言う様に、『定石』を守れば良い文章が書けるのであるか。僕はそうは思わない。確かに優れた文章にはなるかもしれないが、そこに“色”はあるのであるか。本当に言いたい事が言えるのであるか。ウケれば良いと言うのなら、それに準じた文章でも良いかもしれない。が、然し、読み手に伝えたい事が有る書き手にとつては、それは必要以上の枷になるのではないか。果たして書いたその文章に、自身の想いが宿るのであるか。それは書き手のレベルに因る、というのはプロの世界での話であつて、この場に於いて、そこまでの技量を要求するのは少々遣りすぎだと思つのは僕だけであるか。仮にそうであつたとしても、僕はそれを言及し続けよう。文章作法など聞いた事も無く、かつ、僕は構文論を追及する者だけか



らである。それに、真剣に取り組んでいる者ならば、速度こそ違えど、成長して行くものだからである。

一度、考えて貰いたい。小説とは何なのかを。何故、そのような形式で現在まで生き残っているのかを。何故、人がそれを読みたいと思ふのかを。

商業的な発想ではなく、自身が考える事の出来る生き物である事を再認し、その上で考えて貰いたい。この場に於いて猶、多数の書き手が存在する事を鑑みれば自然解しねんる筈である。答えは、言わない。読み手とは何か。何故、批評、評価をするのか。自身の想い、信念に懸けて、違わず答えて欲しい。嘘偽り無く、答えて欲しい。また、上からの目線で書き手に迫るのは何故か、自身で理解して欲しい。それが本当に正しいのかを。正しいと思ふのなら、一作仕上げて、『これを手本にしる』とでも言えば良い。それを放棄し、まだ、正しいと信ずるならば、やはり、文章作法というものの出所と、その正しさを明確にした上で書かれるのが良いだろう。そうでなければ、評価人と自称しても、こちらとしては荒らしをする輩と何ら変わりがない。

丁寧に言おう。お願いだから、根拠も無しに上からの目線で批評、評価するのは止めて頂きたい。遣るのであれば、書き手の遣る気を盛り上げる様な言い方をして頂きたい。是非に、お願いする。また、期待する。

最後に、僕は物を自らの心と表現する。であるからして、それを踏み躪るような物言いをする方達には、その責任を承知した上で書かれる事を改めて期待するものである。

(後書き)

読了されました方がおられましたら、お疲れ様です。如何でしたでしょうか。ご自身のお考えとはどのよう<sup>に</sup>違っておいででしょうか。もし、何かしら思い立った事等御座いましたらお聞かせ願えれば幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5243i/>

---

BeautiFoolのエッセイ 2

2010年10月15日20時56分発行